

『社会科の窓』富山県版 1964年9月(東京書籍)

## 社会の見方の訓練

国立教育研究所 矢口新

社会科で最近構造化ということが言われているが、誤解のないようにしておかなくてはならぬことは、**教育内容の構造化と、学習活動の構造化**とは、非常にちがった概念であるということである。今この点について詳しく論ずるいとまはないが、大切なことは、学習活動——つまり**生徒の行動を論理的に積みあげる**ことであって、単に教育内容の構造化ではない。いわゆる教育内容といわれる概念は知識の体系に近い概念であって、現在新しく問題にする意味はない。

学習活動を系統的につみあげて、社会現象に対して反応する頭脳をつくりあげることが社会を学習することのねらいである。いかなる現象に対して如何に反応する頭脳をつくりあげるかについては、教育する者が予め計画を持っていなくてはならぬ。従来は或る知識を与えることが教育することであると考えられたが、ここには大きな誤りがある。知識と考えられているものは、結局誰かが考えた筋道である。その結果である。それを一通り生徒にも通ってみさせるということ、つまりワンランド、ワンプロセスの教育でどれだけ頭脳に考え方を会得させることができよう。まず何もできないといった方がよいであろう。

現在教科書などに書かれていることはなかなか複雑な思考を経た結果であって、そういう考え方を生徒がするようになるには、その前提になる物の考え方が身について——頭脳に会得されて——いなくてはならない。例えば、「世界の国々」という単元で、国々について順次述べられている。これこれの国は、産業はどう、人口はどう、文化はどうなどと述べられているが、それらが或る順序で構造をもって述べられるには、その述べた人の考え方があつた。その述べられねばならぬ必然の論理がある。一国の産業が国の姿をいかに反映するか、国民の生活をどのようにあらしめているのか、

それが重要な意味をもっているから、国のことを述べるのに産業の状態を述べるのである。この国の農業の人口は80%であるというのと、工業の人口が80%であるというのでは、どれだけの具体的なちがいがあつたかわかるということが前提にあつて、この国の人口は農業が80%であると述べられるのである。社会の姿を人口の産業別によつてつかむというのは1つの見方であつて、これは国を見る場合の1つのメスの如きものである。或る国をみよといわれたら、このような見方がすぐ頭に浮んで来なくてはならないのである。インドという国は農業人口が何%ということをおぼえておくことは殆んど意味がないことなのである。それは年々かわつて行く。そういうものをおぼえるのでなく、**見方を頭脳**が会得しなくてはならないのである。

しかし、産業別人口をみるといっても、それはただ数字をいじくだけではない。数字の多い少いが問題でなく、その数字のあらわす意味が大切なのである。その意味をつかむというのもまた頭脳を訓練しなくてはならぬ。社会において、農業人口何%というのは具体的にはどういうことなのか、生活の姿はどうなのか、文化のあり方はどうなのか、消費や生活の姿はどうなのか、それらの関連において人口比も意味をもつて来るのである。人口比を問題にしたら、同時に右のようなことも頭に浮かんで次々と考えが発展するような頭をつくつて行かなくてはならないのである。どここの国は人口がどうで、産業がどうでなどということをおぼえておくことではない。自分で見方をもつて材料をさがし次々へと思考を発展させて行くように頭脳を訓練するのである。

相当大きく考え方をかえないでは、社会科は本物の人づくりにならないであろう。